

## 2012年度修士論文要旨

川邊 崇史

### 間接話法の独英比較

—『トニオ・クレーガー』を中心に—

小説であれ、報道記事であれ、語りを展開される場面で間接話法は重要な機能を担っている。間接話法における特徴は言語によって様々であり、同族言語である英語とドイツ語においても違いがある。本稿では、間接話法に関してドイツ語と英語を比較し、両言語における語りの手法を考察する。

初めに問題提起として、1968年にイギリスの歌手、メリーホプキンが歌って流行となった「悲しき天使」(Those were the days) という曲の中のサビの部分における英語の間接話法を取り上げる。ここでは英語の間接話法において、仮定法と“that”が使用されていないことから、主文と従属文の関係性が曖昧になり、読み手はコンテキストによってその関係性を判断せざるをえなくなっている。

次に第1章では、*Duden, Grammatik der deutschen Gegenwartssprache* と *A comprehensive grammar of the english language* の記述から、文法理論の整理を行う。*Duden* では間接話法は接続法の機能領域に含まれているのに対し、*A comprehensive grammar* においては独立した“Reporting the language of others” (他人の発言の報告) という章で説明され、そこでの言語手段はほとんどが直説法である。中世英語、初期近代英語の間接話法においてはまだ接続法、つまり仮定法がより広く用いられていたが、現代英語では「間接的指令」においてしか仮定法が使われておらず、ドイツ語と比べると機能領域が限られている。そして、英語とドイツ語の間接話法における最も大きな違いは、英語においては時制が変換され、ドイツ語では叙法 (Mood) が変換されることである。

続いて第2章では、上記のような違いが実際の語りにおいてどのような影響を及ぼしているかを明らかにするため、トーマス・マンの作品『トニオ・クレーガー』を取り上げ、ドイツ語オリジナルと二種類の英訳版を比較考察する。まずドイツ語の原文から動詞の語形を振り所に接続法を拾っていき、さらにその中から間接話法のみを抜粋し、それらに対応する英語訳を照らし合わせて観察する。その際英語では *that* の使用、*that* 節から違う形式（分詞構文、SVOC 構文、*to* 不定詞等）への変換、コロン“:”による *that* の代用、時制の一致など、仮定法を使えないことからくると思われるいくつかの興味深い現象が見られた。それらの現象から、ドイツ語の間接話法では主文との関係性を示ために接続法が用いられ、それに対して英語の間接話法では、仮定法を使わず時制の一致、*to* 不定詞、また重文すなわち主文に従属する内容がいくつか並んでいる場合には分詞構文への変換によって主文との関係性が示されることや、“*that*”が英語の間接話法において最も重要な役割を担っており、重文においては主文との関係性を保つために“*that*”が必要不可欠であることがわかった。

なお、第3章で間接話法の文体的特徴を持つ体験話法の比較も行ったが、ドイツ語も英語も直説法過去の動詞を用いるので、間接話法と違って大きな違いはなかった。